

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.205

ISSN 2432-5295

特集

「秋の夜」

C O N T E N T S

◆ 特集：【秋の夜】・・・01

・ 東京の夜景を気軽に愉しもう・・・02

・ 博多の夜の風物詩「屋台」を楽しむ・・・03

・ ちょっぴりミステリアスな銭湯ナイトツアー・・・03

・ 大阪湾秋の風物詩「タチウオ釣り」・・・04

・ かの文豪も愛したカフェの過ごし方・・・04

◆ 今、こんな仕事しています・・・05～08

◆ 地域に寄り添って地方創生を考える・・・08

◆ 近況&イベントのお知らせ・・・09～10

◆ まちかど・・・裏表紙

・ バンクーバー・イングリッシュベイのマジックアワー

特集

「秋の夜」

夜は毎日やってきて、そして必ず明けていきます。
晴れの日も、雨の日にも。
楽しいことがあった日も、悲しみに暮れた日にも。

平成 29 年版理科年表によると、大阪で日入から日出までの夜の時間が最も短いのは6月20日前後で9時間31分、最も長いのは12月17日前後で14時間10分にもなります。睡眠を7時間とっててもまだ7時間も夜です。今の時期から年末にかけて夜は徐々に長くなっていきます。

稀代のエッセイスト清少納言は「秋は夕暮れ」と記しました。夕暮れに山の端を飛ぶ鳥や日が沈んだ後の風の音、虫の音のしみじみとした趣を表現したのです。今よりも自然との距離が近かった時代ならではの感覚でしょう。彼女の生きた時代と比べて現代は夜の過ごし方にも多くの選択肢があります。

季節の移ろいを感じながら、夜の長いこの時期のナイトライフを楽しみたいものです。
今号では秋の夜の過ごし方をテーマにお届けします。

編集委員会

東京の夜景を気軽に愉しもう

山崎将也
都市・地域プランニンググループ



中央郵便局屋上ガーデンより東京駅と高層ビル

これから冬に向かって空気が澄み、夜景が一段と綺麗になってくる季節です。

東京都の景観に関する調査で、都内の夜景の写真を撮って回っています。スカイツリーや高層ビルの展望台など、夜景を愉しむために高い料金が必要なのところも多いです。そこで、今回はお手軽に（無料で）愉しめる東京の夜景スポットをいくつかご紹介します。

■KITTEガーデン（丸の内）

東京駅丸の内口にある中央郵便局には屋上ガーデンが整備され、無料で開放されています。落ち着いた色の照明で照らされた東京駅の駅舎と白色を中心とした照明でライトアップされた高層ビルの対比を間近で愉しむ事ができます。東京駅の近くには他にも丸の内ビルや新丸ビルなどにも無料で景色を愉しめるスポットがあるので、東京への行き帰りの際には是非立ち寄ってみてください。

■皇居外苑

皇居外苑は、周囲に遮るものがない開けた空間であり、夜間には、霞ヶ関から丸の内、大手町のビル群を見渡すことができます。都心部でアイレベルから高層ビル群を見たり、写真を撮ったりできる場所は少ないため、お奨めしたい場所です。ただし、苑内は暗く、ほとんど人もいないため、少し怖いです。

■東京都庁北展望室（新宿）

高さ202mと、無料で利用できる展望台としておそらく都内一の高さを誇る施設であり、煌めく新宿副都心の高層ビル群を見下ろしたり、遠く東京タワー、スcaイツリー



新宿副都心から東京タワーを望む

のイルミネーションなどを眺めることもできます。都庁にはもう一つ、南展望室もあるのですが、こちらは夜間の公開はしていないので、訪れる際には注意して下さい。

■デックス東京ビーチ（お台場）、隅田川テラス

いずれも水辺の夜景が愉しめる場所であり、デックスからはライトアップされたレインボーブリッジ越しに都心の夜景を見渡すことができます。また、目の前の公園の樹木は一年中イルミネーションで飾られており、幻



デックス東京ビーチより 上：レインボーブリッジと屋形船 下：永代橋のライトアップ



群想的な気分になれる。隅田川テラスは、様々にライトアップされた橋梁やスカイツリーを愉しむことができる他、数多く行き交う屋形船も川の夜景に彩りを与えています。

以上、それぞれに趣の異なる夜景が手軽に愉しめるスポットをご紹介します。他にも下町、工場、空港などまだまだ絵になる夜景がありますので、秋の夜長、皆さんも自分だけの夜景スポットを探してみたいかがでしょうか。

博多の夜の風物詩「屋台」を楽しむ

山崎裕行

九州事務所 (株)よかネット

九州・福岡は、ようやく夏の暑さが和らぎはじめてきました。毎年、暑さが厳しくなっているように感じますが、みなさんの地域は如何でしょうか。

8月末に新潟に行く機会があったのですが、福岡が最高気温31度の日に、新潟は26度だったので、驚いたところです。

さて、本題。今号のテーマが「秋の夜」ということで、涼しくなって来た時に「行きますか！」となる場所と言えば、やはり「屋台」でしょうか。屋台は、もちろん季節を問わずに出ています。夏の屋台は、四方の扉が外され風通しは良いのですが、暑い時はどうしても足が遠のいてしまいます。しかし、これからは心地よい風にあたりながらのビール、焼き鳥、ラーメンが最高に美味しい季節です。肌寒い時には、味がしみ込んだおでんも忘れてはなりません。九州事務所のすぐ近くにも屋台街があり、10軒程度の屋台がそれぞれの味を競っています。常連さんから観光客まで、ぐるりとカウンターを囲んで美味しいお酒、料理に舌鼓。定番の味から、この季節だから味わえるものまで様々です。各屋台、多くても10人程度の客席なので、知らない人同士であっても、すぐ

に打ち解けて会話が弾みます。

このような福岡の屋台ですが、平成25年に市の屋台基本条例が施行された際には、屋台街の移動(別の場所での営業)や、公募による屋台選定などがあり、少し混乱が見られました。名義を借りて屋台を運営していた方の中には、公募から落ちてしまい辞めざるをえないお店もありました。福岡の屋台は観光資源でもあり、「店主」「お客」「地域」それぞれ共存することで、これからも長く残ってほしいものです。



事務所近くの屋台街

ちょっぴりミステリアスな銭湯ナイトツアー



中村孝子

企画政策推進室

暑くもなく寒くもなく、そして夜空に輝く美しい月。秋の夜は、まち歩きに最適です。

銭湯が大好きな私は、近所の銭湯に行くだけではなく、各地の銭湯ツアーに参加したり、旅にでも一日の締めくくりは必ず銭湯です。

その魅力は、背景画(タイル絵、ペンキ絵)、タイル、のれん、番台、桶、宮造り建築(唐破風と懸魚)、格天井、柳行李、釜形ドライヤー、広告入りガラスなど挙げだしたら切りがありません。それらはどれも職人技が光る芸術作品です。もちろん地域の人々の大切な交流の場でもあります。銭湯は古くからある日本の良き文化であり残すべきまちの財産です。

さて、京都から大阪に通勤している私は、実は大阪のまちを知りません。なので、最近、会社帰りにまち歩きを兼ねた銭



レトロな銭湯外観(大阪市旭区 錦水湯)

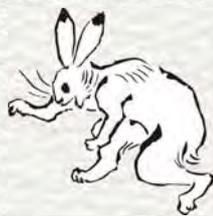
湯巡りを楽しんでいきます。事前に最寄り駅と銭湯までの道順をざっくり調べ、訪れるまちの先入観をなるべく持たないように出かけます。初めての駅で降りた瞬間、心は旅人になり、銭湯目指したミステリーナイトツアーがスタートします。知らない道をジグザグ進み、路地や商店街を歩いているとレトロな建物や看板に出会います。あちこち迷うのも楽しみのうちで、ミステリアスでわくわく感が倍増します。そして、薄暗い夜道に浮かび上がるランドマークの煙突を見つけ銭湯にたどり着くと完全にノックアウトされます。

大理石をふんだんに使った大阪式の浴槽にざぶーんと入浴し、時には他のお客さんとおしゃべりしながら、ゆっくり流れる時間を楽しまます。お風呂上がりにはもちろん冷たい牛乳です。その後もまち歩きを続け、めばしい店を見つけたら遅い夕飯をいただきます。それからようやく帰路に着く。これぞ、私の秋の夜長の楽しみ方です。



まち歩きで出会ったパルナス店舗跡(大阪市生野区)

大阪湾秋の風物詩「タチウオ釣り」



山部健介

地域産業イノベーショングループ

私は一年を通じて、四季折々さまざまな釣りを楽しんでいるが、秋は回遊魚であれ根魚であれ、その気になれば、どんな魚とも遊ぶことができる。

今回、紹介するのは、大阪

湾秋の風物詩「タチウオ釣り」である。タチウオは、スーパーでも700〜800円で切り身が販売されており、食卓にとっても身近な魚だろう。生態的には、北海道〜九州南部沿岸域の表層から水深400メートル程度の泥底近くで群れて生活しているが、河口など汽水域まで入ってくることもある。毎年、9月下旬〜12月上旬にかけて、大阪湾では岸からの釣り（「おかつぱり」でも手軽に狙えるようになり、釣り場はどこもタチウオ狙いの釣り人で混雑する。特に、武庫川〜西宮浜一带は、魚影が濃く、タチウオ釣りの「メッカ」とも呼ばれており、私も頻繁に出没している。

タチウオを狙う時間帯は二つ、早朝と夕方から日没後数時間であるが、この釣りの醍醐味は「夜間のウキ釣り」



タチウオ釣りの風景（西宮市鳴尾浜）

にある。夜釣りの場合、視認性を高めるため、小型のリチウムイオン電池等を搭載した「電気ウキ」という発光ウキを使うことになる。発光色は、緑・赤・白など様々である。

さて、釣りを開始しよう。夕方、釣り人は一様に電気ウキを準備して、エサのキビナゴを付けて、一斉に海に投げ込む。隣の釣り人との間隔は5メートルほどしかなく、窮屈である。完全に夜の帳が下りた19時頃、そこには幻想的な景色が広がる。色とりどりの電気ウキが岸から10〜15メートルの距離で整列しており、その背後には六甲山の夜景が広がる。毎年、この景色をみるたびに、秋が来たと思うのである。そんなことを考えながら、今日も私は釣具屋へ向かうのである。皆様も、ぜひ大阪湾秋の風物詩をご堪能あれ。

かの文豪も愛したカフェの過ごし方

長沢弘樹

サスティナビリティマネジメントグループ

日課のようにカフェに行く、そんな生活の人も多いでしょう。

昼に比べて肌寒く感じることも多い秋の夜は、とりわけカフェを訪れるのに適した季節です。近年はカフェの立地や種類も多様化し、繁華街でなくとも好みの店を見つかったり、目的に合わせて店を選ぶことができるようになりました。珈琲や紅茶だけでなく、気分に合わせてビールやワインを楽しむ店も多く、客層も多様化しています。私も毎日のようにカフェ（喫茶店ですが）に行きますが、学生の頃の習慣を今なお続けていることに苦笑してしまいます。

人はなぜカフェにいくのでしょうか。自分でも分からないのにそんな問いは愚問でしょうか。

文豪ヘミングウェイの晩年の作品、パリで過ごした20代の若き日々を描いた自伝的小説の「移動祝祭日」では、カフェの場面が繰り返し出てきます。目的を持って、或いは気の向くままにカフェを訪れ、仲間と議論し、妻と愛を語らい、空腹を満たします。独りの時は小説の執筆という仕事をこなし、面倒な知人を見つけたらそそくさと逃げだします。そんな刺激的な日常を送るヘミングウェイがカフェを自由自在に使いこなす達人に見える、羨ましくなります。とは言え、これは40年後に振り返って書かれた小説です。ただでさえ美し



い思い出を更に美しく切り取っていることは読み手にも分かります。郷愁を伴った美しさも高度に作画的なものに見えます。

ヘミングウェイがパリにいた1920年代、パブロ・ピカソ、ジェイムズ・ジョイス、ジャン・コクトー等、多くの分野で新しい芸術が華開きました。そんな時代に小説家としての下積み生活を送ったからこそ、パリを離れた後もその経験を懐かしむだけでなく、自身を奮起させる糧とし、死の間際には小説にまで昇華させたのでしよう。

私を含め、誰しもそうした類の経験を持っています。カフェに足を運ぶ理由の一つには、既に失なってしまった、下手をすると忘れてさえしまいかねない経験に力を与え、現実の日常生活を鼓舞することがあるように思います。それにはヘミングウェイのようにカフェを使いこなす必要はありません。目の前のカフェをただ訪れ、気が向いたものを注文する。それだけで十分ではないでしょうか。

「えきまちテラス長浜」がグランドオープンしました



長浜駅から施設全体を望む

地方都市の駅前が寂しくなり、活性化しなければならぬと言われて数十年が経ちます。中心市街地活性化法、立地適正化計画、エリアマネジメント等様々なツールを、どの様に活用するのが今問われています。

平成21年6月中心市街地活性化基本計画の認可、平成25年3月まちづくり準備組合設立、平成26年6月都市計画決定、平成27年3月組合認可、平成27年9月権利変換計画の認可、平成27年10月工事着工と、アルパックが都市計画決定から約3年半に渡り支援させていただいた長浜駅東地区市街地再開発事業が完

成し、駅前の賑わいの拠点となる「えきまちテラス長浜」が平成29年7月末にグランドオープンしました。

【集まる】【繋がる】【伝える】【育てる】という地域住民の4つの想いから生まれた「えきまちテラス長浜」。伊吹山を望む展望デッキやイベント広場等の豊かなオープンスペース、減築による再開発、えきまちマルシェとライフスタイルショップ、駅周辺の複数街区と連携したエリアマネジメントなど、地域の新しい挑戦は始まったばかりです。(中塚)

■「全員同意」「土地はそのまま」「身の丈の規模」「山蔵の曳家」

事業の特徴は、①全員同意型の権利変換方式を採用し、②区分所有者が土地を共有ではなく、分有したこと、③地域のポテンシャルから、低容積の身の丈規模の施設整備を行ったこと、④長浜曳山祭の曳山を収蔵する山蔵があったことから、敷地を2分割し、十分な緑地スペースを設けた片方の敷地に、この山蔵を曳家して整備したこと、等があげられます。特に全員同意型の事業は通常の事業より、事務手続も合意形成も手間がかかるものでした。(松尾)

■「まちに開く」「駅とまちをつなぐ」
空間設計

この建物は駅前の商業施設と言う



イベント広場～グリーンテラス～米川緑地

だけでなく、長浜駅とまちなかをつなぐ公共的な歩廊としての役割を担っています。現在工事中のペデストリアンデッキが完成すると駅と建物空中でつながり、建物内や屋外空間を通り抜けて黒壁エリアへ人々を導く計画です。

特に、ペDESTリアンデッキとデッキ階に設けたイベント広場やまちなか方向に面した緑地等の屋外空間が一体となることで、駅前の「まちなか広場」としてどのように賑わい空間を創出するかが設計の大きなテーマでした。(原田)

■豊かな「新たな公的空間」をどう活かしていくのか

共有部に整備されたイベント広



イベント広場での「夏のえきまえばなナイト」

場、緑地、アトリウムは、民間の建物内にありながら、新たな公的空間として、駅前の賑わいづくり、暮らしの質の向上に寄与することが期待されます。

再開発事業が完成し、今後は、エリアマネジメントとして駅前の他街区とも連携し、これまでの駅前に不足していた「長浜での豊かな暮らし」の一助を提供するとともに、それらを継続して実施するために、色々な人、団体との連携のしくみの構築を進めています。(西村)

※本業務は、中塚一(取締役副社長兼大阪事務所長)、馬場正哲(首席研究監)、松尾高志・西村創(地域再生デザイングループ)、原田捻・三浦健史(建築プランニングデザイングループ)が担当しています。

純米吟醸「藤袴」はロマンの香り

原田弘之：

地域産業イノベーショングループ



秋に「フジバカマ祭り」が開催され、2016年には「第1回京都 藤袴サミット」も開かれました。そうした地域の方々の想

2013年から関わってきた大原野地域ブランド戦略の策定と推進の一環として、今年の初夏に地元の酒米を使用したオリジナルブランドのお酒の発売にやっとなぎつけました。

場所は京都市西京区大原野。洛西ニュータウンの近郊で西山山麓に広がるのどかな田園地域です。紫式部の源氏物語にも登場し、平安時代には鷹狩りや花の宴など、貴族の行楽の地として親しまれてきた地です。そうした歴史と自然豊かな環境で、京都府限定生産の酒米「祝」を育て、京都伏見のキンシ正宗（株）と連携し、純米吟醸「藤袴」をつくりました。

草花の「藤袴」は、淡い紫色の花をつける秋の七草の一つですが、先の源氏物語の第三十帖の題名にもなっています。実は、1998年に大原野でその原種が発見され、それ以降、地元で大切に育てられてきました。そして、2014年からは毎年



いの込もった名前なのです。秋には、香り豊かな藤袴の発するフェロモンに誘われて、渡りの蝶であるアサギマダラが北海道から飛来し、遠くは台湾や香港まで約2400キロメートルを飛んでいきます。そんな動きをするアサギマダラにのせて「藤袴」を広めていきたいと思いません。

瓶のラベルデザインは、そんな想いを受けて、大原野に住むオーストラリア出身のデザイナーが形にしてくれました。「藤袴」の題字は大原野特産がタケノコであることもあり、地元の書道家が「竹筆」でしたためました。

今は数量限定販売の1680円（税込）/720ミリリットルです（高島屋洛西店などで販売）。「藤袴」の酒づくりオーナー制度も始めており、来年度から拡充の予定です。



和歌山市の歴史文化を活かしたまちづくりの機運が高まっています

松下藍子：

都市・地域プランニンググループ



和歌祭の様子

地域の景観的、歴史的すばらしさは、文化財や歴史的建造物などの建物単体ではなく、海や山、田畑など周囲の自然と一体となり、地域全体として感じるもので、その環境は人々の活動があつて維持されています。

和歌山市では、現在歴史的風致維持向上計画の策定に向けて取り組んでいます。「歴史的風致」とは、歴史的な建造物と周囲のまちなみ、人々の活動が一体となった環境を言い、この計画は、それを守り活かしていくための計画です。

和歌山市といえば和歌山城が有名ですが、その他にも市内には多くの歴史文化が残っています。南部の和歌の浦は、古代からの景勝地として、その風景が和歌に詠まれてきました。干潟や島しよの自然的要素の上に、歴史的建造物が

多数残り、景勝地ならではの祭礼が継承されています。その他にも、漁業を生業とし、それに関連する祭礼や風習の残る雑賀崎・田野・加太といった漁業集落、東部の山地と田畑に囲まれた農村集落などがあります。海・山の集落、城下町といった、異なる文化、異なる景観の特徴をもつ見所のある地域がたくさんあります。

和歌山市では昨年度より、雑賀崎と紀三井寺、山東の3つの地域において、住民の方々と景観まちづくりワークショップを行っていただきます。そこでも、農業や漁業などの生業、歴史的な建造物や町並みといった地域の歴史文化をどう守っていくかが課題となっています。新しい要素をとり入れながらどうまちづくりに発展させるか、住民の方々と悩みながら考えています。

文化財保護法改正の動きがあり、市町村が文化財を地域振興に活用する計画を定め、国が認定する制度が改正の柱とされます。今後ますます歴史文化をまちづくりに活かすことが重要となつてきます。



景観まちづくりワークショップ

今、こんな仕事をしています



武藤健司：
地域産業イノベーショングループ

“ひまわりオイル” × “○○○”

お気に入りの食べ方を見つけよう！

今年の7月にグランフロント大阪において、全国各地のひまわりオイルの産地が一同に集結した「ひまわりオイルサミット」が開催されました。

スーパーなどの油売り場には、オリブオイル、えごま油、ココナッツオイル…とさまざまな種類の油が並び、特に、健康や美容効果が高い油が人気です。兵庫県佐用町では、ひまわりオイルの認知を高め販路開拓につなげようと、昨年度から各市町と連携して共同でPRする取組を行っています。

今年度に重視したテーマは「かける」。グランフロント大阪の買い物客を来場者として迎え、各産地のひまわりオイルを、アイスに、野菜に、バケットにかけてテイストイングしてもらい、オイルを手軽に楽しめる使い方とともに提案しました（個人的には、生野菜に粉チーズとともにかけるのがオススメです）。

さらには、グランフロント大阪のレストランとのコラボ企画で、ひまわりオイルを使った料理を開発していただき、ひまわりオイルの魅力と可能性をより多くの人にPRすることができました。



また、参加した市町どうしの交流会では、直面する課題、企業連携による展開などについて意見交換を行い、今後の取組のヒントとなりました。ひまわりオイルは、少しずつ、着実に拡がりをみせています。
*本業務は、地域産業イノベーショングループの原田弘之も担当しています。

さらなる進化をめざす京都市の景観政策

坂井信行：
都市・地域プランニンググループ

大胆な高さ規制によるダウンゾーニングを含む京都市の新景観政策が実施されてから10年を迎えます。

これを記念して京都市では今年、政策の趣旨や成果を改めて確認し、今後の政策展開についての議論を深めていくため一連の記念事業が行われることになっていきます。去る9月10日、その第一弾の取り組みとして鷺田清一氏（京都市立芸術大学学長）、門内輝行氏（大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授）、門川大作京都市長による特別鼎談が行われました。

鷺田先生の基調講演と門内先生の基調報告の後に始まった鼎談では、計画性と自然発生性あるいはユニバーサルなものローカルなものといったジレンマの中で景観を考えるとときにどのように折り合いをつけていくのかという哲学的な話から、コミュニティと景観の関係まで多岐にわたる話題で大変盛り上がりしました。

京都は近年、国際的な観光地としての人気が高まり、諸外国からの観光客も急増し、一部では市民生活に支障をきたす状況も見られるほどになりました。これは、景観政策の成果も要因の一端を担って

いると考えて良いのではないのでしょうか。こうした新景観政策の成果の功罪両面からの検証と今後の展開の方向について、どのような議論が展開されるのか楽しみです。

今後連続講座やシンポジウム、検証レポートの作成などが予定されています。アルパックはこれら一連の事業をサポートさせていただいています。各方面から注目度の高い京都市の景観政策ですが、さらなる進化に向けて微力ながらお役に立てればと思います。

※本業務は、都市・地域プランニンググループの水谷省三と中井翔太も担当しています。

京都から考える
これからの
歴史・文化・創造都市



左から門川市長、鷺田氏、門内氏

気候変動適応策 地域コンソーシアム事業がスタートしました

畑中直樹：

サステナビリティマネジメントグループ

気候変動対策については、温室効果ガスの排出量を実質ゼロに転換していくこと（緩和策）が急務ですが、一方でこれまでの累積排出量のため生じる気候変動の影響に対する対策（適応策）も必要となっています。

COP21のパリ協定においても緩和策（第4条）とともに適応策（第7条）に取り組みことが国際的に定められています。

我が国においても、気候変動の影響への適応計画（2015年閣議決定）が策定され、その中核的な取組として今年度より環境省、農林水産省、国土交通省が連携する本省直轄事業として地域適応コンソーシアム事業（2017〜2019年度の3カ年、2017年度総額3.4億円）がスタートしました。

これは科学的知見を2020年を目標とする第2次気候変動影響調査に活用するとともに、地域における具体的な適応策の立案・実施を推進することを目的として、全国事業と全国を6ブロック（北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄）に分けた地域事業とで成り、全国事業では、全国運営委員会での議論のもと、温室効果ガスの今後の排出量の推移パターン（RCP2.6（ゼロへ転換）〜8.5（BaU）等）から複数の気候シナリオを設定し、気候変動の影響予測に用いる各種気象

データの整備等を進めます。

一方、地域事業では、地域毎の気候変動に対する脆弱性や対策の緊急性等から気候変動の影響予測及び適応策について調査研究（地域毎に3〜6テーマ）を進めるとともに、地域への普及啓発事業、国・都道府県・研究機関等で構成する地域協議会運営を進めていきます。

また、これらの情報は、別途国立環境研究所が事務局として運営する気候変動適応情報プラットフォーム（A-PLAT）を通じて広く発信する予定となっています。

アルパックは、このうち、中国・四国地域について代表事業者として（共同事業者：鳥取大学、広島大学、徳島大学、日本気象協会。他に島根大学、高知大学、国港湾空港技術研究所、三瓶自然館等とも連携）、「瀬戸内海の水産」、「畜産」、「生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）」、「汽水域である六道湖・中海」、「高地性植生」、「地域の果樹であるナシ」の6テーマについて調査研究、各県での普及啓発事業等を進めていきます。

また、ここ3年ほど適応策についての自治体向け研修や影響事例WS等に携わってきた近畿地域についても、共同事業者として（代表事業者：日本気象協会、他共同事業者：プレック研究所）引き続き普及啓発事業に取り組み進みます。

その地域に寄り添って地方創生を考える

23 地方部の人口増加市町村から学ぶこと

※詳細は、弊社ホームページに掲載しています。（<http://www.arpak.co.jp/newsletter/205/13.html>）



森脇宏：

代表取締役社長

ここ2年ほど、本連載で人口増加の参考となる地方部の市町村を成功事例として取り上げ、それぞれの要因を考察してきました。本稿ではその小活として、地方部の市町村が学ぶべきポイントを取りまとめます。

■高速道路を活かした成功事例

高速道路沿いの市町村は、企業誘致で成功していて、このパターンが成功事例の中では最も多くなっています。ただし、全国的高速道路沿いの数多くの市町村が、この方向性を選択したにもかかわらず、限られた市町村だけが成功していることは看過してはならず、産業用地の地価、広さ、ICからのアプローチなど、かなりの工夫が必要であると推察されます。

なお、高速道路沿いでも国土主軸から離れている場合は工夫が必要で、例えば川北町（石川県）では、既存産業の集積がある金沢都市圏という立地条件も活かして企業を誘致し、企業立地で強化された財政力で生活環境を整備して人口増加を図っています。近隣に拠点都市がない東根市（山形県）では、隣接する山形市や天童市と連携しつつ、空港を活かして高速道路や

新幹線を揃えることで企業誘致を進めるとともに、近年は子育て支援を強めて若者層を呼び込んでいます。

■高速道路に頼らない成功事例

数は少ないものの、高速道路に頼らない成功事例もあります。隣接する那覇市のベッドタウン的に人口が増えている南風原町（沖縄県）は、医療機関の集積など、那覇都市圏の中で独自の都市機能を強め、昼間人口の呼び込みで成功しています。近隣に拠点都市がないニセコ町（北海道）や恩納村（沖縄県）では、リゾート産業を梃子としつつ、1次産業とも連携して経済の域内循環を高め、安定的に発展しています。優れた自然環境を活かし、国際写真フェスティバル等を契機に育成したファンを、移住という形で受け入れている東川町（北海道）は、隣接する旭川市の需要に応える事業所の立地も進み、新たな働く場が生まれてきています。

以上、成功事例のポイントを取りまとめましたが、これらを参考としつつ、その本質を読み込み、地域特性に応じて創造的に適用していくことが必要だと思えます。

「持続可能な地域づくり」は、何を指し、どんな方法で進めるのか。アルパックは何のために、どのように持続するのか。「文化資産」活用の実践に、一つの答えがありそうです。

アーカイブー国民の「資産」になる

国立国会図書館関西館での「学研アーカイブ」構築作業はほぼ完了しました。館の専門家に、“閲覧者が見つけ易いように、見よいように”とアドバイスを頂き、分類を手直ししました。「三輪文庫」は、初動から奥田懇談会準備、懇談会運営、国土庁等調査と大きく3つに分かれ、その特徴は各界へのヒアリング、事務局の状況分析・戦略討議の記録が多いこと。河川流域調査や人口動態分析など、知見・データ・手法は、今でも使えます。資料・文献は、あるだけではただの紙切れ。保存・分類・検索・展示方法等、整えると「価値」が着き、立派に「資産」になります。

「三輪文庫」は個人資産ではなく、アルパックの資産。名誉会長に任じられていますが決済権はないので、役員会の承認を得て国立国会図書館へ寄贈し「国民の資産」になります。

文化資産ー人間の資産を「つなぐ」

今年、「神宿る島」宗像・沖の島と周辺遺産群が、ユネスコの世界遺産に登録されました。日本では21番目。世界では1000を超えています。

文化資産を「商品」として活かす「観光」関連ビジネスが着目されています。その経営思想はまだ「成長戦略」型のトレンドのようです。16世紀以来、資本は投資空間を求めて活動を広げてきました。バーチャル空間まで広げて瞬時に飛び回り、いまや成長戦略のフロンティアはなくなったと言われています。でも地球と人間の活動から見れば小さなものです。

地球上には膨大な自然資産と文化資産の蓄積があります。何もしないと忘れられたり、失われたりします。「文化資産」の内、「文化財」資産が定められます。ユネスコがルールを決め、世界遺産リストに登録し、各国が国内法を整えて規制を掛け「まもり」ます。国際的な「世界遺産条約」と国内での人と金でもって「つなぎ」、人類共有の資産を、享受できるようになります。古書籍業が輝いてきます。仏典とか古美術とか専門性と連携プレーはまるでアルパック並み。内容を吟味し、値段まで付けます。お客さんは、世界中の図書館・美術館・大学等々。世界社会の進歩に役立っています。

経営資源ー自己資本を増やす

アルパック最大の資産は、50年間の膨大な調査・計

画及び設計の蓄積。これも“ある”だけでは倉庫料が嵩むだけの紙の山。

金井社長時代、歴史的港湾から文化財へ「柱」が建ちました。文化財修復は、時代が進んでも調査内容が古くならないという特性があります。調査報告書そのものに「値段」がつきます。こうした「資産」の価値は、原価計算や積算方式では計れない芸術作品や宝飾品並み。鑑定・オークションの世界です。

企業会計原則や中小企業会計指針と社内の会計規定は、伝票の山を、経営を導くパワーに変えるルール・システムです。「棚卸資産」評価基準を定めると自己資本強化に「つながり」ます。

社会進歩ー目的意識を磨く

次に、アルパックの存立・持続の目的はなにか？コンサルタント職能の真髄、すなわち「社会進歩」への貢献です。それ故、視野を世界に広げ、足元を見つめ、目的意識を研ぎ澄まし、常にアグレッシブでなければならぬのです。

地域社会は、なりゆきまかせではどうなるか。熱力学の法則が教えています。エントロピー増大を留め、前向きに「進歩」に転ずるのは、人間の意志だけです。アルパックの「信用」の源は、如何なる資本系列にも属しない「自主自立」であること。おかげでハングリー精神が、「意志」を鍛えました。高度経済成長を知らない世代が育っています。

有言実行ー「持続」への心得

アルパックの持続は、新ハングリー世代の成長にかかっています。実際には、文化財調査もデジタル・アーカイブ構築作業も、地味でハードな作業です。その作業の中で、真理を見つけるセンスや感性が養われます。

今も昔も、云われていますように、シンクタンク、コンサルタント職能のころすべきは、二つの陥穽（落とし穴）に落ち込まないこと。すなわち、仕事師に留まるな、「業者」になるな、事件師になるな、「情報屋」に終わるなです。持続への心得は、まさに心の内にあり。しんどい時こそ「古典哲学」学習。忙しい時こそ、芸術・芸能に励め、みんなのために奉仕せよです。

ローカルの文化資源が待っています。自分のふるさとで、事務所のあるまちで、「持続可能な地域づくり」に貢献しましょう。口先で言うだけでなく、実行しましょう。

なお、デジタルアーカイブ学会（会長：長尾真・元京大総長・元国立国会図書館長）は、4月に設立されました。

近況 & イベントのお知らせ

長野市善光寺の空き家再生視察 他地域での空き家活用につなげるには

竹内和巳

地域再生デザイングループ

今年度、生活デザインチームでは、空き家活用に関する業務に複数携わっています。そこで、空き家活用によるエリアリノベーションの事例として取り上げられることも多い、長野市善光寺の門前町を訪問し、空き家活用の取組をされている(株)マイルームの倉石智典さんにお話を伺うとともに、活用事例を見学しました。

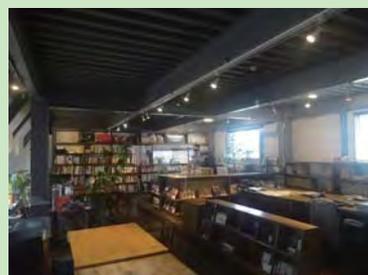
倉石さんの取組については多くの場所で取り上げられているので詳しくは割愛しますが、マイルームの事業では、不動産・設計・施工を倉石さんがワンストップでマネジメントすることで、トータル利益をあげていることが特徴です。空き家活用では、物件の掘り起こしをする不動産事業が赤字になることが多いですが、この事業スキームによって解決されています。

さて、善光寺の取組を他地域に適用させることは可能なのでしょうか。現段階では、地域にワンストップで事業を行える主体がない場合がほとんどだと思います。そのような状況では、ワンストップで事業を行う主体の育成、あるいは事業者

間での利益の再分配も含めた不動産・設計・施工による連携体制の構築が必要となると思います。また、行政に求められることは、空き家活用の主体が新たに活動を開始するための初期支援や活動を円滑に進めるための制度設計なのではないかと思います。

倉石さんにまちの中の空き家活用事例を紹介してもらっている際には、倉石さんと顔なじみの方がたくさんいらして、倉石さんが地域の中で丁寧に仕事をされていることが伝わってきました。

視察をなんとか業務にいかせないかと苦悩しながら、竹内がお送りしました。



空き家活用事例の一例

「集落を復興する」ということはどういうことかを 考える～新潟県長岡市山古志^{やまこし}地域を視察して～

羽田拓也

地域再生デザイングループ

熊本県南阿蘇村の復興むらづくり推進協議会の皆さんに同行させていただき、中山間地域での震災復興の先進地として、長岡市山古志地域に伺い、現地では、復興公営住宅やインフラ復旧等の状況を見学したほか、住民の方々との意見交換などを通して震災後の思いや取り組みなどもご紹介いただきました。

山古志には14の集落があり、2004年10月中越地震が発生した当時は約2,100人が住んでいましたが、現在は約1,050人とほぼ半分に、高齢化率も約50%となっています。ハード面の復興だけでなく、2008年には山古志産の野菜などをふんだんに使った料理を提供する農家レストランが地域の女性主体で開業するなど、震災後の新しい営みも生まれていま



復興モデル住宅



山古志産の産品が使われている「山古志弁当」

す。また、元々の住民で農作業や行事に「通う」住民も一定数おられるほか、農産物などの販売所の運営などに全国からボランティアで来られるなど、地域を支える方々も多いことにも驚きました。

2005年策定の長岡市復興計画では、住宅やインフラなどの復旧を行う「復旧期」(発災から概ね3年間)、本格復旧及び復旧されたインフラと市民の力をもとに徐々に地域の価値を高める「再生期」(4～6年目)、地域全体が新たな魅力と活力ある長岡市として生まれ変わり安定的に発展していく「発展期」(7年目以降)と位置づけられています。暮らしが落ち着き、崩れた山肌には草木が生い茂り、被災された様子は見た目には分からないので「復興した地域」と言いがちなですが、「山古志は復興した、と言われるが、『復興』は『戻して興す』こと。今より良くすることと捉えると『復興』に完了形はないと思う」。これまで復旧復興の事業推進を進めてこられた行政の方の言葉が印象的でした。

現在、アルパックでサポートさせていただいている南阿蘇村では、「復旧期」として住宅再建やインフラ復旧等に取り組みはじめたところですが、山古志に行かせていただき、今後の「再生期」、「発展期」も見据えた「復旧期」の検討・事業推進をサポートできれば、と実感しました。



坂井信行：

都市・地域プランニンググループ



バンクーバー・イングリッシュ ベイのマジックアワー

そこには豊かな暮らしが確かにあった

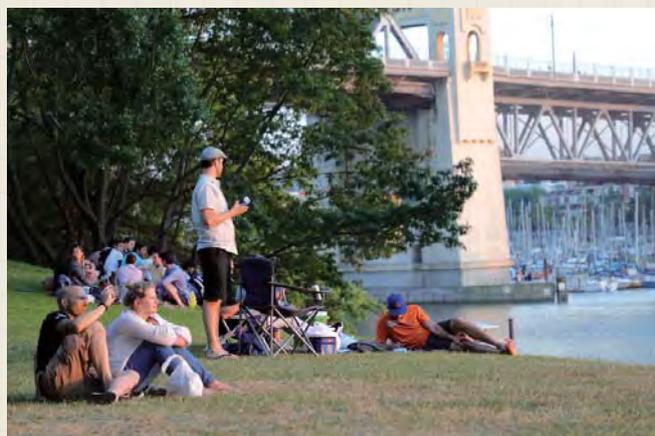
カナダ南西部の西海岸に位置するバンクーバーは、いわゆる西岸海洋性気候で一年を通して温暖で過ごしやすいのですが、夏の季節以外は非常に雨の多い都市でもあります。

北緯49度のアメリカとの国境線にほど近く、日本の最北端よりもはるかに高緯度にあります。このため、日本と比べて夏は日が長く、冬は日が短くなります。雨が少なく日中の時間帯が長い夏は、バンクーバーでは一年のうちで最も過ごしやすい季節といえそうです。

7月の初めにバンクーバーを訪れました。昼間の気温は30度以上になりますが、最も高くなるのは夕方5時ぐらい、朝方は半袖だ

とやや肌寒く感じます。また、夜の9時ぐらいにならないと陽は沈みません。イングリッシュベイを西に望む湾岸のビーチが夕陽の名所になっており、この季節に少しでも日光を浴びたいと思うのでしょうか、仕事が終わった夕方(といっても日が長いので感覚的には昼過ぎですが)、屋外で過ごす人々の姿をあちこちで見かけました。ベンチに座っていると、寝転がって本を読む人、カップルで海を眺める人、シートの上で家族団欒の時間を過ごす人など、思い思いの過ごし方をする人々を観察することができました。湾内に目をやると多くの船影も見えます。

やがて太陽が湾を囲む山の向こうにゆっくりと沈む日没の時間帯を迎えます。沈みゆく太陽の位置によって空の色が刻一刻と変化するマジックアワーです。昼間の空から茜色の黄昏の空、そして紫がかった薄暮の空へと変わっていきます。薄



明かりの中に浮かび上がる人々の影が非常に印象的です。わずかな時間ですが、日々の雑事に追われて過ごす日常を忘れることができました。

太陽が沈んで辺りが暗くなると、贅沢な時間を過ごした人々はそれぞれ家路へと向かうのでした。「豊かなパブリックライフ」なんてわざわざ言わなくても、そこには豊かな暮らしが確かにありました。日本で掛け声ばかりが先行する「働き方改革」。私たちは何てちっぽけなことに踊らされているのでしょうか。

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。



アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦1-19-24名古屋第一ビル6F TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11スクエア九段ビル1F TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。